Rainy Day Blue

皇雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｒａｉｎｙ　Ｄａｙ　Ｂｌｕｅ

【Ｎコード】
Ｎ３０５１Ｆ

【作者名】
皇雄

【あらすじ】
幸せって何だろう？幸せとは何か、いつしか忘れてしまったそんな感情を、仲間と過ごす日々により取り戻していく笑いあり涙あり？の物語

プロローグ

不幸って何だろう。
何を基準に不幸と決めるのだろうか。

石ころに躓いた時？
朝寝坊した時？
大きな怪我をした時？

大抵は運が悪かったと言うのかもしれない・・・。
それは不幸ではないのだろうか？
いや、同じことなのだろう。
だが、運が悪かったという方が程度は低い感じがする。

俺の人生の中で不幸と呼べる事が一つだけある。今まで感じてきた幸せを全て吹き飛ばすような不幸。

俺はあの日から、素直に幸せを感じられなくなってしまったのかもしれない。
幸せということから逃げてしまうようになったのかもしれない。

なぜって？

だって・・・・。

失うのが怖いから。

ただ・・・・。

それだけ。

第一話：新学期初日

俺の名前は、大藤皇太（おおふじこうた）１５歳。

この春、地元を離れたこの町に引っ越してきた。
そして俺は、双葉高校という公立高校に通うことになっている。
別にこの高校にどうしても入りたかったわけではない。
ただ、地元を離れたかったのだ。

新学期初日、まるでゲームかアニメの主人公のように俺は遅刻していた。
とりわけ急ぐわけでもなく、とぼとぼと通学路を歩いていく。
これがゲームやアニメだったら、同じく遅刻してきた美少女とばったり・・・、なんてことはないだろうな、もうすぐ昼だ。

などと馬鹿げた妄想をしていると、桜並木が見えてきた。
この桜並木を過ぎると学校の校門が待っている。
なんともまぁ盛大なお出迎えだ。
正門の前に着いた・・・。
閉まっている・・・。なんで！？
いや確かに妥当か、最近は不審者も多いからな、俺は考える間もなく大して高くない校門をよじ登り下駄箱へ向かう。
丁度校舎のところまで来ると、こらっ君！という声が聞こえたが俺は無視した。

「こらっ！そこの男子生徒！君！君だよ！無視するなぁ！！」
どうやら俺のことらしい。

歩くのを止め声のする方を向くと、窓から上半身を乗り出して手を振る女性がいた。
容姿からすると先生だろうか？
まずった・・・。いや、どちらにしても教室に行けば先生に見つかり怒られる。それにこれはゲームでいうところのイベントではないだろうか？
・・・・・・・・・・・・。
とりあえず言っておこう、俺はそのてのゲームはあまりやったことはない。
いやほんと。
誰に弁解してんだろ俺。

「早く来なさい！」

とぼとぼと歩いて行く。
「なんですか？」
俺はとりあえずしらをきっておいた。
「なんですかじゃないわよ、今授業中でしょ？っていうか今登校してきましたって感じね？」
「寝坊っす」
とりあえずしらをきっておく。
「寝坊って・・・。新学期初日だよ君？何年生？」
「1年です。因みに昨日入学しました。」
「昨日は入学式だから当たり前でしょ！？何昨日転校してきましたみたいな言い方してんのっ！！」
ツッコミは上々だな。もう一つ軽いボケをしておくか。
「あの、遅刻しちゃうんでこれで失礼します」
「大丈夫もう手遅れ」

今のは本業の人に言わせれば甘いんじゃないだろうか？
「これから、楽しい高校生活が始まるのに今からそんな行動してて
どうするの？」

「楽しいんですか？」

冷めた言い方だった。
少しの沈黙、ざぁっという葉の揺れる音がいやに耳に残った。
「あ、当たり前でしょ！？とにかく遅刻なんて習慣がついちゃうと
後々も大変だから、今後はしないように気をつけなさい！」
分かりました。と一言いい俺はその場を去った。女性も満足したの
か何も言わず俺を見送った。

下駄箱で靴をはきかえ教室に向かった。因みに入学式にはちゃんと
出たから自分の教室は把握している。
少し歩いたところで中庭に誰かいることに気がついた。無視しよう
としたがまたも声をかけられた。今度は男だ。
「いよぅ、遅刻かい？大藤君」
この学校は窓越しに話すのが主流なのだろうか？
あれ？今この男俺の名前を言わなかったか？

「誰っすか？」
「はっはっは、君の担任の片瀬祐樹先生だ。昨日挨拶したんだがな、
まぁよろしく」
と、その男は笑いながら言った。見たところまだ若い感じでフレン
ドリーだが、雰囲気が好きじゃない。
「じゃ、俺授業がありますんで」
と話を切り上げようとしたが、
「今さら何を言う少年よ、後・・十分もすれば授業終わるからちょ
いと話ししようや」

と、笑いながら止められた。
「立場上君の遅刻の理由を聞かなくてはならないんだが？」
「寝坊っす」
看破入れずに言った。
「そうか、じゃー明日からはちゃんと来れるよな？」
「努力します」
「・・・・」
「・・・・」
しばらくの沈黙。
「よし、携帯の番号教えろ。明日から毎日モーニングコール入れてやるから」
「なんでだよ！？」
「知ってるか？努力しますってのは、やりませんって意味なんだぞ？社会人の常識な？」
「知るかよ！！」
「最初が肝心なんだよ、癖ついちゃうと後々大変だぞ？遠慮するなよ」
誰が遠慮などするものか、第一初対面でこの馴れなれしさはなんだ？
「番号忘れちゃったんで明日にしてください」
とりあえずこいつから逃げたい。
「う～ん、まぁ一回寝坊したからってモーニングコールってのもかわいそうだわな」
単なる嫌がらせだろ。
「じゃ、明日遅刻したら番号教えてもらうから」
わかりました。と俺は教室に向かう。
「あ、因みに学校に携帯持ってくると校則違反だからメモって来いよぉ～」
俺は、振り向きはせず手をひらひらさせて合図した。
つーか、遅刻決定かよ。
ちょうどチャイムがなり授業が終わったところのようだ。

ガラっとドアを開け、年配の女性が出てきた。
俺をちらりと見たが、何も言わず去って行った。
俺も気にはせず教室に入る。

がやがやしていた教室が一瞬静まり返ったが、気にもせず自分の席に着く。
鞄に入れておいた教科書を机の中に入れ席を立つ。
その時には周りもさっきの騒がしさを取り戻していた。
とりあえずトイレにでも行って時間を潰そうかとドアに手をかけると、勝手にドアが開き片瀬が現れた。
「いよぅ、どこ行くんだ？授業始まるぞ？俺の楽しい授業が始まるぞ？」
と、肩を掴み教室の中に戻された。
次はこいつの授業かよ。
「トイレです」
「遅刻、サボりのコンボは許さんぞ？」
と、笑いながら・・・いや、殺気がこもった笑顔を俺に向け両肩を掴まれた。
「本鈴までには戻りますぅ」
俺は力任せに手をどけトイレへ向かった。
片瀬は、力任せに手をどけられた事に少し驚いていた。
（ちょっと強く掴んだのに・・・）
用をたし終えると授業の予鈴がなった。
トイレと教室の距離を考えると、取り立て急がなくても本鈴までには間に合う。
教室に戻ると大半の生徒は席につき授業の支度をしていた。
俺の席はなんと窓側の一番後ろの席だ。一歩間違えれば一番前の席になっていたが、この時ほど自分の名字に有難味を持った事はないだろう。
席に着き教科書を出そうとするが次の授業がなんだか分からない。

俺は、前に座る女子の背中を指で１０ｃｍ位なでた。
ひゃうっという声と共に小柄な体がびくんと動く、・・・ん、面白いな以外と。
ちょっと引きながら俺の方を振り向く、顔がびっくりしている。当り前か。
「次の授業って何？」
「れ、歴史です。あ、あの、普通に呼んでください・・」
「ん、わかったありがと」
そう言うと女子は、ズズズと椅子を引き再び前を向く。心なしか前より距離があるように思える。
（普通に呼べって・・・、俺あんたの名前知らないんだけど・・・）
片瀬って歴史の教師だったんだ。
似合わない・・・。
本鈴が鳴って授業が始まってもあまり聞くつもりもなく、俺は空を眺めていた。
・・・・・・・・・・・・。
あ、今の雲、たい焼きに見えた。

昼は食堂でパンを買い屋上で食べた。屋上とは、以外にも人がいないもんだという事を今日初めて知った。
というよりか誰もいなかった。
おかげで昼はのびのび過ごすことができた。明日からここへ来よう。
午後の授業も難なく過ごし放課後になった。
俺は遅刻の一件で片瀬に呼ばれ、職委員室に向かっていた。
「失礼します」
ガラッとドアを開け中に入ると片瀬の姿を探した。
見当たらない、あのクソ教師が、呼んでおいていないなんて失礼なやつだ。
呼び出した本人がいないのならしょうがない、帰るか。
失礼しましたと、職委員室を出ると俺は下駄箱へ向かった。

靴をはきかえ校舎を出る。
しばらく歩きふと今朝女性と話をした場所を見ると、数人の男子が群がっているのが見えた。何をやっているのか興味はあったが、片瀬から逃げたい気持ちが勝っていたためその場は帰ることにした。
体育館横まで差し掛かると、煙草をふかしている男が目に入った。片瀬だ。
片瀬はにこやかに手を振り俺を呼んだ。見つかった、最悪だ。
とぼとぼと歩いて行く。
「いよぅ、お帰りですか？」
相も変わらず笑いながら話しかけてくる。
「こんなところで何やってるんですか？」
「ん？ここ体育教員室でさ、俺卓球の顧問やらされてんだよ。ったくめんどくさい」
教師の言葉とは思えん。
「そうですか、頑張ってください、じゃ俺はこれで」
と、行こうとすると腕を掴まれた。
「ちょい待ちなさいよ、つれないな～～どうせ今から帰ったってやる事ないだろ少年」
本当に失礼な男だな、こいつは。
「ほっといてください」
力任せに腕を引っ張り片瀬の呪縛から解き放たれる。
「お前さ、なかなか力あるよな。」
「なんですかいきなり、気色悪い」
とりあえずけなしておいてみる。
「さらっと傷つくこと言うなよ、俺さ自慢じゃないがそこそこ力がある方だと思ってるんだよね、んで、昼も今も結構な力でお前を掴んだつもりなんだけど、さらっと解かれちゃったからさ、内心ちょっと傷ついちゃってるの」
知るかそんな事。つーかまさか、そんなこと言いたいが為に俺を職委員室まで呼んだんじゃないだろうな？

「というわけで俺と腕相撲勝負しよう」
たぶん今日見た中で一番の笑顔だと思う。
「さようなら、また明日」
俺は待ってるであろう桜並木を目指した。
こらっ、と、またも腕を掴まれた。
「なんですか？」
「付き合えよ」
「桜並木が俺を待ってるんですよ」
「待ってないし、待ってたとしても大丈夫、やつらは逃げない」
確かに逃げない。何か手はないかと考えているうちに俺は、体育教委員室に連れ込まれた。
「よっしゃ、んじゃー一回勝負な」
「因みに、俺が勝ったら携帯の番号教えろ」
にこにこと話を進めていく。ふざけんな、そこまでして俺の番号知りたいのかこいつは。変態か？まさかそっちの気があるんじゃないだろうな？
「お前が勝ったら俺ができる範囲で、お前の願いをかなえてやろう」
何でもと言わないところがしっかりしてる、というよりかちゃっかりしている。
しかたない、番号はいずればれるだろうからまぁいいか、早く終わらせて帰ろう。
ぐっと構える片瀬、意外と腕が太い・・・・。
俺もそれに合わせ手を組む。何か妙に緊迫した空気になる。
「んじゃ、レディー・・・ゴッ！！」
片瀬の合図と同時に力を入れる。う、動かない。
片瀬が力を強め始めると、ぐぐぐっと俺の手が押される。
「おらぁ、どうしたへなちょこ」
ずいぶん余裕ではないか片瀬教諭。
しかし、俺も負けない、少し動いたところで押し戻す。なんかこのにやけ顔に負けたくない、という闘争心に火がついたようだ。

「お前の事情は聞いてるぜ」
随分余裕のようで、勝手にしゃべり始めた。
「あ、そう」
ぐぐぐっと少し片瀬を押す。
「おぉ・・・、俺はお前に気を使うつもりはないぜ」
少し傾いた腕を垂直に押し戻す。
「別に、気を使ってくれなんて言ってないだろうがぁ」
ぐぐぐっと傾ける。二人とも少し手が震えてきた。
そんなやり取りを数分繰り返したところで数人の生徒が入ってきたが、少しでも気を抜けば、もっていかれそうで気にはできなかった。
「不良クンになんかなったって楽しかないぜぇ」
「別にそんなもんになる気はないですよぉ」
押しては戻し、押されては戻しの繰返しをしている内に、ギャラリーが増えていることに気がついた。先生がんばれとか、男子頑張れとか声援が聞こえてくるが気にする暇もない、うざったらしさはあったが・・・。
「そうかい、なら・・素直に楽しい高校生活を楽しもうぜ・・・」
その言葉になぜか抑えられない怒りが込み上げてきた。いや、抑えようとしなかっただけなのかもしれない。
「素直になんかぁ、楽しめるかぁぁあ!!」
ずどんっ、という音とともに長かった戦いが終わりを告げた。
片瀬は一瞬なにが起きたのか分からないという顔をしていた。が、自分の意志とは反する腕の方向を見て驚いていた。
俺は、鞄をとり、野次馬を押しのけ走ってその場を去った。
勝ったにもかかわらず素直に喜べない、何故か嫌な気分で気持はいっぱいだった。
(知ったような事言いやがって・・・迷惑なんだよ)
夕日が切ない気持を煽るようだった。
どっか、気晴らしにでも行こうかと思ったが、気分が乗らない。
このまま帰るか。

こうして新学期初日は幕を閉じた。放課後の出来事がなければそれなりだったのにな。

第二話：新学期二日目

ピピピピピ・・・・。
俺は無機質な機械音によって目が覚めた。
止めなければ永遠に鳴り続けるであろうその機械音を止める。
時刻を見ると６時３０分を指している。この時間に目覚めるのは昨日と同じだ。
まだ醒めきっていない頭をフラつかせシャワーを浴びに脱衣所へ向かう。
のろのろと服を脱ぎ風呂場に入る。１０分ぐらいシャワーを浴びて出る。
体を拭き、服を着ると、頭にタオルを垂らし台所に立つ。

一人暮らしとは不便なものよ、自分で作らなければ朝飯など出てこないのだから・・・。
といっても大した料理はできない。たいてい炒飯や、とりあえず肉やら野菜やらを炒めたものだ。男が作る料理なんて所詮そんなもんだろ？肉じゃが？煮魚？何それおいしいの？

そんなことはさて置き、今日は普通に学校へ行くか、昨日は何となーくぼーっとしていたら１０時くらいになってしまったが、今日遅刻すると担任の片瀬に携帯の番号を教えなければならないのだ。何とも厄介な。しかし、片瀬という男はよく分からない。たった一度の遅刻で、俺が不良なんかになるわけないのに、もちろん理由は他にもあるんだろうが、今は話したくない。
って、誰に言ってるんでしょうね俺は。

飯も食べ学校の支度をする。学校までは歩いて３０分あれば何とかなる、後は時間までぼーっと・・・。

・・・・・。
っと！！マジで寝るところだった。
アホな事やってないで早く話を進めろよな・・・。

昨日とは違い、他の生徒が多い、（当り前か）ブレザーやベスト、ワイシャツだけのやつなど、校則範囲内でいろんな着こなし方があるようだ。
ふと見ると、横を歩く数人の女子がこちらを見て何やらこそこそと話をしている。反対側には誰もいない、というより端を歩いているのだから当たり前だ。
もう一度女子の方を見ると、こちらに気づいたのか足早に俺の先を行ってしまった。
なんだ？ああゆうのを見るといい気分はしない。
桜並木に差し掛かる。柄ではないがこういう風景を眺めるのは昔から好きだった。
あぁこのまま眺めていたい・・・。しかしそんな考えは校門のところに立っている一人の教師により打ち砕かれた。
片瀬だ。
なんでいるんだ？まさか俺が来るのを待っているのか？
ははは・・・まさかそんなことはないだろ。
「いよぅ、おはようさん、今日はちゃんと来たな。えらいえらい」
案の定話しかけられてしまった。
「おはようございます。何でこんなところにいるんですか？」
とりあえず聞いといてみる。
「今日は朝の見回り当番なんだよ。つーかそのブスっとしたしゃべり方やめない？もっとこうフレンドリーにいこうよ」
相も変わらずヘラヘラしたしゃべりだ。
「そのヘラっとしたしゃべり方を止めてくれたら俺もそうしますよ」
あはは、敵わんな、と笑う片瀬を無視し下駄箱へ向かう。ちょっと待てよ～と聞こえるが無視だ。

丁度校舎に差し掛かると、昨日の女性が窓辺にいる。白衣を着ているように見えるが、保健室の先生だろうか？
こっちに気づいたのだろう、手を振ってきた。
が、見えないふりをして無視をした。だいたい俺は、そんなに友好的な方じゃない、意味もなく自分から他人に干渉しようとは思わない。

下駄箱で靴をはきかえる。そこでも、何人かの男子が俺の方を見て、何やらこそこそと・・・。
よし、捕まえて聞いてみよう。標的はそうだな、あの二人組がいい。
上履きをしっかり履くと俺は唐突に走り出した。一瞬男子がびくっとしたが逃げる間もなく捕まえてやった。
「俺になんかようですか？」
二人の肩をがっしり掴み、逃がさないようにする。
「あ、いっ、いえ、なんでもないです」
「あぁそう？何か俺の方見てこそこそお話してるように見えたもんで」
二人を解放すると、あははと苦笑いしながら小走りで走って行った。ちらっと上履きを見たが、2年生のようだ。なんか悪いことしたな。
そのまま自分のクラスへ行きドアを開けると、一瞬だがみんながこちらを見て動きを止めた。なんだ？俺はそのまま自分の席へ行き座った。

しばらく外をぼーっと眺めていると、ガラッとドアが開き二人の男子が入ってきた。二人は俺の存在を確認すると、おぉっ居るじゃん、と俺に近寄って来た。
「よっ、おはよ、聞いたぜ？昨日片瀬と腕相撲やって勝ったらしいじゃん」
と、短髪茶髪の男と

「いきなり失礼だよタカ、挨拶しなきゃ」
と、いかにも優等生っぽい感じの男が話しかけてきた。
「おぉそうか、悪いな、俺は藤波鷹尾ってんだよろしく」
「僕は、近藤薫、よろしくね」
と、自己紹介されてしまった。近藤薫って、近藤勲みたいだ。
「大藤皇太、まぁよろしく」
少しそっけなく言ったが、そんなことはお構いなしに鷹尾というやつは話を進めてきた。
「んでんで？ホントなのか？あの片瀬に腕相撲で勝ったってのは！？」
いつの間にか前の席に座り目を輝かせて聞いてくる。
「ん？まぁな、というかなんでそんなに興奮してんだお前は？」
うぉまじか～～と一人興奮している。おぃ人の話を聞け。
「昨日、君が片瀬に腕相撲で勝ったって噂が広まってるんだよね」
にこにこと話す。片瀬とは違い、なんだろ？さわやかな感じだ。
こっちの方が断然いい。
「だからどうした？」
その言葉に二人はきょとんとした顔をする。
「なんだよ、あの片瀬に腕相撲とはいえ勝ったんだぞ？もっと喜べよ」
理解しがたいという顔をされても・・・。
「だから、それがどうした？別に騒ぐことないだろ？」
再びふたりは顔を合わせる。
「もしかして知らないの？」
「なにが？」
うぉまじかよと大げさに驚く鷹尾をみて。
「片瀬って結構有名なんだよ、この学校に入ってから格闘技の先生を片っ端から倒しちゃったらしいんだよね」
「空手の顧問って元日本チャンプだろ？すごいよな！？」
あの片瀬が？信じられん。

「片瀬に強くしてもらおうとこの学校に来るやつとかいるしね」
まぁ人は見かけによらずというやつか。
「んで、その片瀬に勝った男として結構有名なんだぜ？おまえ」
たかが腕相撲で勝ったからって大げさだな。
今朝のひそひそ話はこれか。しょうもないな。
「俺はそんなことより、ここにいる三人の名字に藤とついてる事が驚きだ」
二人は少し考える仕草をすると、おぉ！！と歓声をあげた。
そのあと三人で他愛もない話をして過ごした。
俺はこの最初にできた友達？と、これから様々な事件に巻き込まれていくのだが、今の俺には知るよしもなかった。
ただ、これから起きる事件が俺ら三人に絆というものを作ってくれたということは確かかもしれない。

不幸というのはそう、唐突にやってくる。
昼食を食べ終えると、少し学校の中を見て回ることにした。気分転換のつもりで歩き回ることにしたのだがそれがケチのつけ始めだったようだ。
とぼとぼと歩いていると、二人の女子が三人の男子と話をしている。気にも留めず、とぼとぼと近づいていく。
「おい、どうすんだよこれ！！」
「す、すみません」
「あーあ、牛乳なんて臭いが残っちまうだろうが、ほら臭いぞ！！」
どうやら牛乳をかけてしまった女子が絡まれてるようだ。
男ならここで助けに行くところだが俺は違う。面倒事は極力避けたい。可哀そうだが、あっちも女子には手を出さんだろ？
「す、すみません、あ、あの、クリーニング代出しますので・・・」
「あぁ？そんなもんいらねーよ、その代り・・・」
へへへと何とも下品に笑う男子、おぃおぃ高校生。
「ちょっと面かしな、へへへ」

前言撤回、手をあげるどころの騒ぎじゃない。というかお前ら学校で何しようっていうんだ?俺にはしょうもない発想しかできん。一応男だからな。
「あ、あのどこに・・」
「いいから来いよ!」
と腕を掴む、周りを見たが俺ら以外誰もいない。ちっ、しょうがない。
「おい」
一瞬びくっとしたが、先生じゃないとわかると強気になった。
「なんだお前?」
「その辺で許してあげたら?クリーニング代出すって言ってんだし」
「お前には関係ないだろ!?」
確かに関係ないんだが・・・、ここは何かと理由をつけておくか。
「その人、俺の姉ちゃんなんだ」
一瞬場が固まる。
「行こうぜ」
状況が飲み込めないといった二人の手を掴みその場を去ろうとしたが、ちょっと待てやと呼びとめられてしまった。
「何か?」
「話終わってない、俺たちはそっちの姉ちゃんに用があるんだ!!弟だか何だか知らないが引っこんでろ!!」
俺は無視してそのまま歩き始めた。
無視すんな!の掛け声とともに俺は殴られた。
「いって・・」
「これ以上殴られたくなかったらそいつら置いてけ!!」
わけ分からん。そこまで執着すんなよ。
「あんた達このまま走って逃げろ、邪魔だから」
でも、とたじろぐ二人に早く行け!!と一括すると二人は走って逃げて行った。
「おいっ!!何してんだお前!!」

お前が何してんだよ、このドスケベが。
「いいじゃん、女子には逃げられたけど、こいつで憂さ晴らししようぜ」
と三人に囲まれた。ちっ、めんどくさいなこいつら。

おらっ、と一人が殴りかかってくる。それを避け、腹に一発入れ蹴り飛ばす。
同時にもう一人が殴りかかってきた。拳が当たるギリギリで避け、その反動で上段蹴りを食らわす。体制を崩したところで横から思いっきり蹴飛ばしてやると、そのまま崩れ落ちた。
その瞬間横から殴られた。そうだもう一人いたんだ。
振り向くと目の前に拳が迫ってくる。それを間一髪のところで受け止め、外側に捻ると敵の体があらわになる。腹に一発けりを入れ、下がった頭を蹴り上げる。
そのまま倒れこみ一応事は終わりを告げた。
最後にやられた奴は当たり所が悪かったのか鼻血を出している。
先ほどやられた男が立ち上がる。どうやらまだやるらしい。
うらぁ！！と再び殴りかかってくるがそれを受け止め、己の拳を相手の顔面めがけ振りぬく、敵はそのまま吹き飛び動かなくなった。
喧嘩なんて久々にやったもんだから、拳が痛む。
よく見るとどうやら2年のようだ。
ふと後ろを見ると、数人の生徒が見ている、やばい。
俺はそのまま走って逃げる。
と、角を曲がったところで誰かとぶつかった。
「いって、すみません」
さっきの女子だ。
「い、いえ、あ、あの、助けてもらってありがとうございます」
あたふたと話す二人は、正直、可愛かった。
いやいやいや、そんなこと考えてる場合じゃない。
「あの、よかったら名前、教えてください」

何故か恥じらいながら話す女子は、正直、可愛いと思った。
いやいやいや、早く逃げないと俺。
「えっと、1年3組の大藤です」
「2年4組の高橋由実です。えっと、よろしくお願いします」
正直何をお願いされたのかよく分からない。
「えっと、2年4組の勝俣奈美です。ありがとうございました」
二人は深々と頭を下げ、お礼を言う。
「いや、いいって、それより気をつけな、この学校以外と変なやつがいるみたいだから」
と、柄にもなく爽やかに対応する。
とりあえず、早々に話を切り上げ、俺は教室に戻った。

椅子に座ると藤波と近藤が話しかけてきた。
「うぃ、お前飯一人で食ったのか？」
唐突に変な質問を突き付けられた。
「俺の勝手だろ、かまうなよ」
「何いってんの？友達でしょ？コウ君」
と肩に手を掛けてくる。
「馴れ馴れしいな、お前」
「まぁいいじゃん、クラスメイトなんだし、仲良くしようよ、コウ君」
相変わらず爽やかだな近藤。
「ということで明日からは三人で学食だぁ」
勝手に決めんな。
と、俺らはまた他愛もない話に花を咲かせていた。

放課後になり、帰り支度をしていると、藤波等に遊びに行かないかと誘われた。
だがそのお誘いも、片瀬の呼び出しにより断ることとなった。
『えー、1年3組の大藤皇太、至急職委員室まで来なさい』

校内放送とあらば、逃げるわけにもいかない。
たぶん昼間のことだろう、先生にチクるなんてあいつら以外とチキンだな。
失礼します。と、職委員室に入り片瀬を探す。
いない・・・、野郎・・・。
そこに一人の先生がどうしたと聞いてきたので、片瀬に呼ばれたことを言うと片瀬の席で待ってるよう言われた。
待つこと5分。片瀬が帰ってきた。
「いよぅ、来てたか」
来てたかじゃないだろ、自分から呼び出しといて。
「よいしょ、んで？何で呼ばれたかわかってる？」
片瀬はイスに座ると煙草を出した。
が、隣に座っている女教師に怒られ、しぶしぶしまった。
「わかりません」
とりあえずしらをきっておく。
「昼休みに男子三人が保険室に運ばれたのよ、んで、どうやら喧嘩したらしいんだけど、一部始終見てたやつによると、その相手がね1年の大藤だろうって話なんだけど・・・。お前喧嘩したの？」
できれば喧嘩になる前を見ててほしかった。と内心悔やんだが、いなかったものはしょうがない、いたらそいつに任せてるとこだ。
「あぁ、それ俺です」
とりあえず嘘言ってもしょうがない。
「んで？喧嘩になった理由は？」
片瀬はペンをくるくる回している。真面目に聞く気あんのかこいつは。
「女子が絡まれてたので助けました」
嘘は言ってない。むしろそのために喧嘩したんだから。
「へぇ、女子を助けるためにねぇ、でもお前らの周りに女子はいなかったらしいじゃん」
女子を逃がしたところも見てなかったんかそいつらは。つかえん！！

「まぁなんにしろ、やりすぎだ。一人は鼻が曲がっちまったらしいし、もう一人はろっ骨二本ヒビだとよ」
知るか、自業自得じゃい。
「とりあえずまぁ、三日間停学」
・・・・。まじか？ということは土日合わせて5日間休みじゃん！！ラッキー。
「にすると土日合わせて5日間休みになってお前はウハウハだから、5日間朝早く来て校庭の掃除な」
なんですとーーー！！！
「ど、土日もか！？」
「あったりまえだろ」
最悪だ・・・。
「因みに自宅謹慎だからな、まぁ土日は出歩いてもいいが掃除はしに来いよ」
「あ、自宅謹慎なら家にいますよ」
「ざけんな、掃除しに来い」
ちっきしょう！！ついてねぇー。
とりあえず話は終わり帰らされた。
高校生活二日目にしてこれか・・・。昨日と合わせりゃ立派な不良だわな。
この先楽しいことなんてあるのだろうか？
いやあるではないか、朝掃除しに行かなければならないことを抜かせば実質5連休！！
自宅謹慎なんて言っても誰も見ちゃいない！！
遊ぼう。うんと遊ぼう。俺は心に誓った。
なんて妄想をしながら俺は家に向かった。

第三話：新学期三日目

ピピピピピピピ・・・・

今日もまた、同じ時間に目を覚ます。
いつものように学校に行く支度をする。
そして気づく、俺今日から自宅謹慎じゃん。何やってんだ俺、寝よ。
そう、俺は昨日喧嘩をして停学処分になってしまったのだ。
なんで喧嘩をしたかというと・・・、めんどくさいので前話を参照してほしい。

時刻は7時27分、制服のまま寝るのはどうだろうと思いつつワイシャツは脱いで、Tシャツのままベットに横になる。
さすがにシャワーを浴びると目が覚めるところだが、ご飯を食べたて満腹の俺に、睡魔は颯爽(さっそう)と現れた。
うとうとして気持ち良くなってきた時にふと思い出す。
朝は学校に掃除しに行かなければならないんだった。
ちっきしょーー、と体を起こし脱ぎ捨てたワイシャツとブレザーを着る。
時刻は7時52分、どう考えても掃除どころかHRにすらギリギリ間に合うかどうかの時間だ。
しょうがない、俺の愛車を使うしかないか。
俺は自転車にまたがり競輪選手並みにペダルを漕いだ。
桜並木に差し掛かる。時計を見ると、8時12分。
頑張った！頑張ったぞ俺！！
俺は最後の力を振り絞り学校までラストスパートをかけた。校門に見慣れた男が立っている。
片瀬だ。
俺はおはようございまーす。と過ぎ去ろうとしたが、荷台を掴まれ急停車した。

「うおっと！！危ないじゃないですか！！」
「おはようございまーす。じゃ、ねーだろうが！！」
何で怒ってるのかよく分からなかった。挨拶がダメだったのか？まとすの間を伸ばしたから怒ってるのかこの人は？
「今何時だと思ってんだ？」
時計を見る。８時１４分。
「８時１４分ですよ。全然間に合ってるじゃないですか」
ほれほれと時計を見せる。
「ちっがーう！！なんでお前は普通に登校してんだよ！！普通、朝早く来て掃除するもんだろうがよぉ！？」
両肩を掴まれ、ゆさゆさと前後に振られる。
「いやいや、何時に来いとか言われてないし」
「確かに言わなかったけれどぉ、言わなかったけれどぉ」
うううっと下を向いてしまった。
「おなか痛いんですか？」
首を傾げて心配そうに聞くが、ちっがーう！！と跳ね返されてしまった。
「とりあえず今から掃除しろ！終わったら俺のところか、山崎先生の所に報告に行くように！！」
山崎？初めて聞く名前だ。
「あの、山崎って誰っすか？」
「なんだお前、山崎先生の事知らんのか？保険の先生で美人なんだ！うちの高校じゃー結構有名だぞ？」
腕を組みうんうんと頷く。
「山崎ねぇ、知らないっす」
「先生を付けろバカ者が、とりあえず山崎先生は大抵保険室にいるから、ちゃんと報告しに来いよ、後、掃除をちょろまかすなよ、後で見て回るからな」
びしっと指をさされる。
「はいはい、わかりましたよー」

自転車を引きながらその場を去ろうとする。
「はいちょっと待ち」
呼び止められた。要件はいっぺんに言えよな。
「うちの学校で自転車通学したいなら、ワッペンを買って自転車につけなさい」
「ワッペン？何それおいしいの？」
おいしい訳がない。
「盗難防止にナンバーが書いてあるシールみたいなもんだ。因みに、一つ５００円なり」
以外と高いな。
盗難防止なんだから、しょうがないしょうがないと肩をポンポン叩かれる。

　そして俺は掃除用具を片手にいざ戦地へ！
と、意気込みたいが、ざっと見たところあまり汚くはない、適当に掃いて終わらせてしまおう。
と思ったが意外とゴミというものは落ちている。
部室の所なんかは酷かった。お菓子の袋なんかが結構落ちている。
何やってんだお前ら、ちゃんと部活してんのかよ。
あとは砂なんかが多かったかなー、時期のせいだろうか、思ったより落ち葉が無かったのは不幸中の幸いといえよう。
大変だったがちょっとした発見もあった。
至創館という所だ。中を少し覗いたが畳がびっしり敷いてある。たぶん柔道とか空手専門の建物なんじゃないだろうか？
あとはミニサッカー場みたいのと、テニス場を発見した。
一番びっくりしたのが弓道場まであったことだ。
意外と部活に力を入れてるなこの学校。
２時間かけ一通り掃除を終えた。あぁのどが渇いた・・・。
ゴミを捨て、用具を片付けると俺は職委員室に向かった。
中に入り片瀬を探す。

いない・・・。
まぁ期待はしていなかったけどな。
中を見渡すと授業中だからかほとんど人がいない。
俺はその足で保険室に向かう。
初めてくるな。
こんこんと戸を叩き失礼しますと中に入る。
はい、誰もいませんよ〜。
一応誰かいませんかーと呼んでみるが、返事はない。
しょうがない食堂でも行って一服つけるか、と、振り向いた瞬間何かにぶつかった。
長い黒髪がふわりと舞い、一瞬それに見とれてしまった。
それはドスンと尻もちをつき、いたたたと腰を擦る。
白衣を着ている。この人が保険の先生か？
「あはは、驚かそうとして近づいたんだけど、急に振り向くからぶつかっちゃったぁ」
何しょうもないことやってんだあんたは。
見ると新学期初日に説教してきた女性だ。
「よいしょっと、んで君なんか用事かな？見たところ調子が悪いってわけじゃなさそうだし」
ぽんぽんっと服に着いた埃を払い俺の顔をジロジロと見てくる。
「ん？どっかで会ったっけ？」
新学期初日にあなたに説教された生徒ですよ〜〜。
「いや、分かんないっす。掃除終わったんで報告しに来ました。」
そっぽを向いて話すと、黒髪を靡(なび)かせ俺の視界に入ってくる。
「こらこら、話をする時は相手の顔を見て話しなさい」
めんどくさいな、俺はじっと彼女の顔を見る。
しばらくの沈黙、何かしゃべれよ。
と、唐突にバシっと頬を叩かれる。
「なんでそんなに見つめるのよぅ」
俺はぐへっとその場に倒れこんだ。

「なんで叩くんだよ！！おかしいだろ！！」
叩かれた頬を擦る。意外と痛い・・・。
「いやぁ君があんまり見つめるもんだからつい、ごめんごめん」
てへへと笑う。ついじゃねーだろまったく。
片瀬の言う通り確かに美人だが・・・。
この行動はどうなんだろう？有りなのか？
「とりあえず報告はしましたからねっ！俺帰りますからねっ！」
立ち上がりパンパンと埃を払う。
「おぉそうか、君が停学中の大藤君か！そういえば一昨日会ったわね」
今さらかよ、しかも人の話聞いてないし、いや聞いてるのか？
「そうですね！」
はいはいと呆れて言ったが、聞いてるのか聞いてないのか勝手に話を進めていく。
「そうかそうか君がぁ？へぇ～～あの三人をね～～へぇ～」
にやにやと・・・。うざったらしいなこの人、話し方が心なしか片瀬に似ている。
とりあえず無視だ。かまってたら一日終わっちまう。
「じゃ、失礼しましたー」
すたすたと保険室から出ていく。
「はい、お疲れさまでした～」
お、意外と素直に見送るではないか。
「因みに、気をつけなさいね。あの三人復讐してやるーとか言ってたから。一応止めといたけどね」
その場で立ち止まる。
あの三人？あぁあの（・・）三人か、まぁ鼻骨とろっ骨痛めてりゃそうそう手出しはしてこないだろう。
俺はそのまま保険室を出ると、ちょうど授業終了のチャイムが鳴った。
後ろから聞いてるの～？と聞かれたような気もするが、まぁ気のせ

いだろう。
しかし面倒なことになったな、あいつら治ったらリベンジしに来るってことかよ。
まぁそん時になったら考えるか、めんどいし、それよりどっか寄って帰るかなー。
と、気楽に考えていたが、面倒事はすぐ傍まで来ていた。
が、今の俺には知るよしもなく、このまま遊びに行ったらまずいから一旦家に帰って着替えてからにしよう、などと遊びに行く段取りを決めている始末。

自転車を引きながら校門のところまで来る。
体育教官室？だっけ？のところで片瀬がタバコをふかして待っていた。
お前ぇぇぇ。というかよく片瀬に会うな。狙ってるのかこいつ？
「いよぅ、ご苦労さん」
にこにこと手すりにもたれ掛り俺に話しかけてくる。
おつかれーっす、と過ぎ去ろうとしたがまたもや荷台を掴まれた。
「なんっすか？」
「いやいや、報告は？」
あきれ顔を見るのは初めてか？
「山崎先生に報告しましたよ」
ハンドルを引っ張るが進まない。
「おーそうか、どうだ？美人だったろ？」
ズズズと自転車を自分のところまで引っ張ってくる。
「そうですね・・・、つーか放してくださいよ」
「なんでだよ、ちょっとお話ししようよ」
なんだこの暇人は！？
「暇なんですか？教師のくせに」
かなり酷いことを言ったつもりだ。
「俺、次の時間授業ないし」

ニコニコと返されてしまった。いや仕事しろよ。
「んじゃこうしよう、お互い一つずつ質問し合って答えていこう。その方が話が弾むしな」
何勝手に決めてんだよ、つーか弾まねーよ。
「じゃー最初は俺な、ぶちゃけ学校に来るのはだるい？」
なんだそりゃ。
「だるい」
適当に答えておく。少しの沈黙。
「いや、次お前な」
煙草に火をつける音がする。
しょうがない少し付き合うか。
「この学校で格闘技制覇したのになんで卓球の顧問やってるんですか？」
「やる人がいないから」
即答かよ。
「じゃ次俺、ぶちゃけ不良じみた方がかっこいいと思う？」
なんだそりゃ。
「どうとも思わない」
本当か？という顔をして俺の顔を覗き込んでくる。あぁ一度殴ってやりたい。
「ハイ次の質問どうぞ」
いつ終わるんだこれ。
「ぶちゃけ山崎先生が好きだ」
「パス」
即答かよ。しかもパスってあんた。
「じゃ次俺、ぶちゃけ反抗期だ」
本当にパスしやがったこいつ、最悪だな。
「片瀬教師に対して反抗期」
片瀬はガクッと肩を落とし鼻をすする。
「次の質問、あんたは俺が不良になると思ってんの？」

「思ってる。つーかね君、そりゃーうちの学校は不良と呼べる奴は結構いるが、新学期初日から遅刻するは、次の日には喧嘩して停学食らうやつなんて本校初よ？」
知ったこっちゃない、たまたま良くない事が続いただけだ。
「次、これからも遅刻や喧嘩をするかもしれない」
「時と場合と気分による」
小さな声で気分って・・・、と聞こえた。もう帰ってもいいかな？
「次最後、あんた結婚してるの？」
しばらくの沈黙。
「パ、パス」
ざけんな。
「いるんですね、にもかかわらず山崎先生の事が好きだと？あーあ最悪」
ぶちゃけ教師に対してこの態度はどうかと思うが、なんとなくここで今までの鬱憤を晴らしておきたかった。
「ざけんな！俺は美代を愛してる！ほほほ本当だぞ！！」
めちゃくちゃ動揺してんじゃねーかよ。
「次！！学校は楽しいか？」
しばらく考える、楽しいか？昨日あんなことがあったにもかかわらず楽しいか？馬鹿か、楽しいわけあるか。
「分かりかねます、まだ入学して二日しか経ってないし」
そりゃそうだと頭をかじる。
「じゃ、俺行きますんで」
俺は自転車を引きながら歩き始める。
「昨日・・・」
かまわず片瀬がしゃべりだす。いつもなら無視するところだが、何となく聞かなければいけない気がした。
「昨日、お前が帰った後に、２年の女子が二人俺のところに来たんだ。なんでも大藤君は自分らを助けるために喧嘩したんだと、たぶん校内放送聞いて来たんだろうな。経緯を話してくれたよ、二人と

もあまりにも真剣だったから信じた。
丁度そこに校長と教頭が居てな、そういう訳なら停学は無しにしようかって話が出たんだが、とりあえず相手に怪我を負わせた事には変わりないからそのまま継続するそうだ。」
それはありがたい、５連休が無くなってしまうところだ。掃除しに来なきゃならんが。
「で？それがどうしたんですか？」
ぶっちゃけ状況は何も変わっていない。
「うーん、まぁ何だ？とりあえずこういうことがありましたよ、という報告と、ぶっちゃけお前の言った事、信じて無かったからな」
信じて無かったのかよ。まぁーそうだろうな。
「正直悪かったと思ってる。すまない」
と片瀬は深々と頭を下げた。意外だ。ただのヘラヘラしてるスケベ教師じゃなかったのか。
「いや、いいっすよ、頭なんか下げなくても、俺が悪いわけだし」
片瀬はそうかと、にこりと笑った。今まで見た中で一番切ない笑い方をしていた。
「それとあの三人にも処分が下るそうだ。と、もう一つ、今回の件は内申書に響かないそうだ、これは吉報だろ？」
正直どうでもいい。あいつらがどうなろうが、内申書がどうなろうが別にどうでもいい。
「そうですか、じゃ、これで失礼します」
軽く会釈をして校門を出る。
少し歩くと、おーいと呼ばれた。振り向くと片瀬が立っている。
「理由はどうあれ、もう喧嘩すんなよ～～」
俺はそのままヒラッと手を上げ、再び桜並木道を歩き始めた。
喧嘩ね、別に好きでやってる訳じゃない。中学校のころも何度か喧嘩をしたことはある。態度が気に食わないと言う奴が多かったかな、その時も相手に怪我を負わせ、結局俺が悪いことになった。手加減してるつもりなんだが・・・、まぁここは中学よりか幾分かましか。

家に着くと取りあえず表に出てみることにする。冷蔵庫の中身も危ういしな、買い物がてら街を散策するのもいい。
夕方、町の散策も済み、買い物も済んだ。小さいスーパーはあるものの、未だに商店街が栄えている。意外だ。
俺が前住んでいた所は、商店街なんて荒んだものになっていたのに・・・。こんな言い方だと田舎ってやーねーと聞こえが悪いが、この街は、前住んでいた町よりも大きいし建物も結構ある。と、一応フォローしておく。
帰る途中、見慣れた二人を見つけた。藤波と近藤だ。近寄り声をかける。
「いよぅ、今帰りか？」
二人に近づくと少し様子がおかしい。
「や、やぁ、コウ、何してるの？」
どこかぎこちない。心なしか腹を押さえている様に見える。
「あぁ、買い物してきたんだ」
藤波はそっぽを向いて会話に参加する気配がない。
「どうした？なんか元気ないな藤波」
顔を覗き込むと口の横が少し青い。喧嘩か？
「なんだ喧嘩か？気をつけないとお前らも停学になっちまうぞ」
少し笑って見せたが二人は乗ってこない。
「実はコウ・・・」
と近藤がしゃべると、止めろ！！と藤波が大声をあげた。
「どうした藤波・・・」
ざぁっと葉が揺れる音がした。いやに耳につく。
行くぞと近藤の手を取り藤波は走って行ってしまった。
何だ？どうしたんだ？
俺は訳も分からず家路についた。
家に戻るがさっきの出来事が頭から離れない。
俺は食材を冷蔵庫にしまうと、学生書を取り出した。

そのまま電話を取り、学校に電話する。片瀬居ろよ。
祈りが通じたのか電話に出た相手は片瀬だった。
「すみません、近藤薫の家の電話番号教えてほしいんですが・・・」
なんだ？と言いつつガサガサ音が聞こえる。
「いえ、ちょっとあいつに話があるんで・・・」
「そうか、言うぞ？ｘｘｘｘ－ｘｘｘｘ－ｘｘｘｘだ」
俺はそれをメモする。
「ありがとうございます。失礼します」
電話を切ろうとすると、
「おい大藤、帰り際に約束したこと覚えてるか？」
といやに真剣な口調で話す。
「え？えぇ、覚えてますよ」
ならいい、と片瀬は電話を切った。
何だ？まぁいいやと、今度は近藤に電話をかける。
あいつらが喧嘩したとして、多分あの態度は俺絡みだ。だったら俺は知らなければならない。というか俺絡みであいつらに迷惑かけたくない。
最初は母親が出た。なんかすごく若い声をしていたが、本当に母親か？
「はい、薫ですけど」
と薫の声がする。
「よう、皇太だけど」
とあいさつをすると、少しぎこちない返事が返ってきた。
「どうした？学校で何かあったのか？」
最初はなんでもないと中々話そうとはしなかったが、５分くらい粘るとしぶしぶ話をしてくれた。
「最初に言っとくけど、この事は他言しないでほしい」
「あぁ分かった」
「実は、放課後、先輩数人に袋叩きに逢った。
なっ、喧嘩じゃない・・・そんなのリンチじゃないか。

「そいつらコウのせいで停学になったとかでコウを探してたんだけど、停学中で今はいないって言うと、見せしめだとか言って殴りかかって来たんだよ。俺とタカしかいなくてさ、俺らも抵抗したんだけど、数が多すぎて結局一方的にやられちゃったよ、ははっ」
声が笑ってない、むしろ震えている。
「悪い、俺のせいで迷惑かけた」
「いや、俺はいいんだけど、タカが結構怒ってて、その、なんていうかコウに対してじゃなくて・・・、あいつらコウの悪口とか結構言ってて、そんな奴らに手も足も出なかった自分が許せないって・・・」
なんてこった。まだ出会って一日しか経ってないのに、俺が悪いのに・・・。
「帰りに、校門で片瀬に会ったんだけど、走って逃げてきちゃった。あはは、明日怒られるかな・・・」
その時さっき片瀬が言ったことを思い出した。
『おい、帰り際に約束したこと覚えてるか？』
帰り際？
『理由はどうあれ、もう喧嘩すんなよ～～』
片瀬は知っているのか？もしかしたら知ってて確認したのか？いや、だったら薫に確認の電話ぐらい入れるだろ、それともそこまで気が回らない男なのか？ありえる。
「因みに袋叩きに逢った事を教師にばらしたら、今度はクラスのやつらが酷い目に逢うって言われちゃったから、頼むから教師には言わないでくれるかな？」
話す声に力がない、震えている。
「あぁ、因みにそいつらの名前わかるか？」
「何する気だよっ！？」
力がない声に力が入る。
「責任はきっちりとる」
「馬鹿言うなよ！！停学中なのに！！もしばれたら停学どころの騒

ぎじゃなくなるよ！？」
怒鳴られた。心配して怒ってくれている。昨日出会ったばかりの男に対して・・・。俺のせいで酷い目に逢ったのに・・・。
「ざけんな、大事な友達がやられて黙ってられるか！」
うっ、と声が漏れ沈黙が続いた。電話口からはすすり泣く声が聞こえる。
大事な友達。そうだ、昨日知り合ったばかりの男に対してこれだけ思ってくれているやつが二人もいる。こいつらは俺にとって大事な友達だ。
「ありがとう、でも分からない、ごめん・・・」
たぶん本当に知らないんだろうな。
「分かった、巻き込んで悪かったな」
「いや、しょうがないよ、たまたま教室に俺ら二人しかいなかったわけだし・・・」
しょうがないわけないだろ。
俺はもう一度謝り電話を切った。
さすがに鷹尾のところに電話をかけても、あの状態だと話すらしてもらえないだろう。

話ではあいつらも停学になったらしいな、大人しく自宅にいるとも考えにくい、明日は掃除が終わったら遊べそうな場所を探してみるか。
会ってどうする？また喧嘩をするか？そういえばあいつら怪我してるんだったけな、関係ないか、動けなくなるまで傷を深めてやる。
そう考えるとさらに怒りが込み上げてきた。
いや、それだと同じ事の繰り返しだ、どうする・・・・？
・・・・・・。
ぐぅ～・・・。
緊張感の欠片もないな俺の腹は・・・。
食事を作る。もちろん炒飯だ。少しは料理のレパートリーを増やさ

ないと飽きちゃうな。
飯の後は風呂を沸かしＴＶを見る。
風呂に入る、一日の中でこれが一番心安らぐ瞬間だ。
あぁなんて至福の時なんだ・・・。
風呂から出てお茶を飲みながらまたＴＶを見る。
このまったり感もいいんだよねー・・・。
・・・・・・・・・・・・・・・。
いやいやいや、こんなにまったりしてる場合じゃないだろ俺。
さっきまでの怒りは何処にいっちゃったの？
しかし、あいつらどうしてくれよう。
と考えてみたもののやっぱりボコボコにするのが一番という結論に出てしまう。
それでは同じ事の繰り返しだ。
グダグダ考えていたが、いつの間に現れた睡魔に誘われ、俺はワンダーランドの世界に飛び立ってしまった。

第四話：新学期四日目

夢を見た。
雨が降っている。
見渡す限り闇、俺はそこでただ立ち尽くしている。
雨が強くなってくる。
俺はただそこに立っているだけ、何をするわけでもない。
その傍を一台の車が横切る。
俺はこの車を知っている。
青色の車。
車が横切る際、運転手の顔がちらりと見える。
俺はこの人を知っている。
一筋、雨とは違う滴が、俺の頬をつたう。
俺はその車の行く末を見送る事が出来なかった。
その車の結末を知っているから。
雨とは違う滴が溢れ出る。
俺はただそこで立ち尽くすしかなかった。

ピピピピピ・・・・・。
ハッと目を覚ます。濡れた頬を拭くと、体が湿っていることに気づいた。
どうやら汗をかいたようだ。気持ち悪い・・・・。
最悪の目覚めだ・・・。
冷えたお茶を一杯飲む。あぁ、喉が潤っていく・・・。
汗をかき体が気持ち悪いのでシャワーを浴びる。
（夢にまで出てこなくても忘れねーよ・・・、ったく）
風呂場を出るとふと気づく、あぁ、ひどい顔してんなお前・・・。

鏡に映る自分を指でなぞる。

時刻を見る６時４８分。
軽く飯を食べて、自転車を飛ばせば7時３０分までには学校に行けるな。
そう言えば何時に来いって言ってたっけ？何時とか言われてないよな？
うん言われてない。
こんな事を考えてると読者の方々から、皇太！！そんなこと考えてる場合じゃないだろ！！と怒られてしまう気がするが、とりあえずそっちは考えがある。
あいつらに有効か分からない、たぶん無駄に終わってしまうかもしれないが、喧嘩をして同じ事の繰返しをするよりかはこの方がいい。
え？それは何だ？いやいやまだ教えられませんなぁ、ふぉっふぉっふぉっふぉ・・・。
・・・・・・・・・・。
何やってんだろ俺。

俺は支度をし、学校へ向かう。校門のところまで来ると、今日は違う教師が見回りをしている。
しかもこの教師にもワッペンを付けろと怒られた。
しょうがない帰りに買って帰るか。

そして今日も掃除用具片手に、俺は戦地へ向かった。
おぃおぃ、昨日の今日でこれか？何でお菓子のゴミが昨日と同じくらい落ちてんの？
お前ら、ちゃんと部活してんのか？
俺は一日ここで見張っていたい衝動にかられたが、そこまでやる気力はないと5秒で諦めた。
昨日よりか集中してやったせいか、１時間ちょいで掃除は終わった。

さて、報告は・・・・。
山崎のとこでいいか、片瀬はどうせいないだろ、授業中だし。
俺は掃除用具を片付けて保健室に向かった。
保険室の前まで来ると、話声が聞こえる。
ノックをすると、どうぞと声が聞こえた。
入ると、男子生徒二人が治療を受けている。
「掃除終わりました」
中には入らず報告する。
山崎は生徒の腕に何か塗りながら、分かった御苦労さまと、返事をした。
治療を受けている生徒は薬品がしみたのか声に出して痛がっている。
俺は失礼しましたと声をかけ保険室を出た。
その足で、生徒指導室まで行く、もちろん怒られにではなく、自転車に着けるワッペンを買いに行くためだ。
何も生徒指導室で売らなくても・・・。
生徒指導室に入ると年配の教師が出迎えてくれた。
歳で言うと６０歳は超えていそうだ。
授業中なのにどうしたと聞かれ、事情を説明する。
停学中であること、掃除をしてきたこと、自電車にワッペンが付いていないこと、その教師はそれ以上は聞かずワッペンを取り出した。
用紙にクラスと名前を書きワッペンを貰う。
ワッペンには４５２と書いてある。
なるほど、この番号で誰の自転車か分かるのか、しっかりしてるな。
俺は失礼しましたと部屋を出る。
少し歩き気づく、俺金払ってない・・・。
まっ、いいか、今度言われたら払おう。いやいいのか？
・・・・いいだろ？
そんな事を考えていながら足は自転車置き場に向かっている。
ま、昼飯代が浮いたし良いにしよう。

さてと、あいつらゲーセンかどっかにいればいいんだけどな、あいつらとはもちろん鷹尾と薫をリンチにしたあの三人だ。
俺と同じく停学になったって言ってたが、大人しく家にいるはずがない、なんせ俺がそうだからな。

俺は自転車を走らせ昨日見つけたゲームセンターを回ったが、いない。
くっそ、他にゲーセンなんてあるのか？
あとは、商店街しか残っていないが、遊ぶところなんて在ったっけ？
とにかく探してみることにする。
駐輪場に自転車を止め商店街を歩きまわすが、あの三人どころか遊ぶところすらない。
コンビニでジュースを買い外で飲んでいると、向いのパチンコ屋から見たことある三人が出てきた。
おぃおぃ高校生・・・何やってんだよ。
あの三人だ。俺は近寄り声をかけた。
「おい、あんたらちょっと待てよ」
すると一人がちらりとこちらを見て歩くのをやめた。
「おまえ！！大藤！！」
それを聞いた他の二人もこちらを向く。
「お前のせいで俺らは怪我させられた挙句、停学まで食らったんだぞ！！」
自業自得だ。全部お前らが悪い。
「自業自得でしょ？それはそうとあんたら、関係ないクラスメートをリンチにしたらしいじゃん」
俺は三人を睨んだ。
三人は睨み返してくる、やる気満々だな。
「お前が居ないって言うからな、憂さ晴らしだ！！」
憂さ晴らしだと？ふざけんな。相手の言葉にまた怒りが込み上げてくる。

「関係ない奴まで巻き込みやがって、ふざけんな」
「とりあえず場所を変えるか、ついてこいよ」
と三人は歩きだした。どうやら人気のないところに連れていくようだ。
俺は三人の後をついて行くと、小さな公園に連れていかれた。
昼間だというのに暗く草が生い茂り、誰も使っていなさそうな公園だ。
「よし着いた。さてやるか」
と三人はこちらを向く。
俺は人差し指を立てる。
「おい、今から好きなだけ殴らせてやる、その代り一つだけ約束しろ、今後一切他の奴らに手を出すな」
三人は少し驚いき、ひそひそと話し始めた。
「今後お前が俺らの言うことを聞くってんなら考えてやってもいいぞ」
三人はにやにやして条件を突き付けてきた。
そうきたか、だがこれで他の奴らに手を出さないならそれでいいか、この場でこいつらを殴り倒してもこいつらはたぶんまた教師に言うだろうな。言い方によっては俺が一方的に悪くなる。
俺はいいが同じ事の繰り返しだ。
「分かった、お前ら約束は守れよ」
三人はへへへと笑いながら俺に近づいてくる。
「おぉよ、とりあえず気が済むまで殴らせてもらうぜ」
相変わらずやられ役みたいな笑い方をしやがんな。
などと考えていると殴り倒された。
あぁ、殴り返したい・・・。
俺はそのまま殴られ続けた。

どれくらい経っただろうかあいつらは満足したようで帰って行った。
体が思うように動かない、相当殴られたようだ。

幸い顔はあまり殴られていないようだが、泥まみれだというのはすぐ分かった。
とりあえずこれで喧嘩したってわからないだろ。
空を見上げると微かに空が茜色に染まっている。
もうすぐ夕方か、なんとか体を起こす。体に激痛が走るが、なんとか立てそうだ。
壁にもたれ掛りながら歩く、なんとか歩ける。帰ろう。
歩くたびに体に衝撃が走る。道行く人は汚いものを見るように俺を通り過ぎる。
誰一人として声を掛けてこない。
ある程度歩いたが、体が限界に達してきたのか、足が上がらなくなってきた。
家まではまだもう少しあるのに、と顔をあげると神社が見える。
あそこで休むか、俺は最後の力を振り絞り神社まで歩いて行く。
意外と大きい、周りを見るが誰もいない、俺は木のベンチに横になった。
微かに木の香りがする。
俺はそのまま目を閉じた。少し・・・、寝よう。

ふわり、微かに良い匂いがする。
と同時にアルコールの匂いがし、何かが顔をかすめ俺は目を覚ました。
ざぁぁぁ・・・
・・・・・・・。
「大丈夫？」
静かなしゃべり方だ。
「えっと・・・何？」
俺は状況が把握できなかった。
なんせ目を覚ましたら女性が俺の顔を覗いているではないか、何故

か恥ずかしい衝動にかられた。
体を起こそうとしたが、起こせない。
「大丈夫？怪我してるみたいだけど・・・」
見ると、手には消毒液を持っている。
「もしかして手当てしようとしてくれたのか？」
その女性はこくりと頷いた。
「そうか、ありがと」
よく見ると、彼女は巫女姿である。この神社の人か？長い黒髪のポニーテールがよく似合っている、にしても若いな。
「少し休ませてもらえば大丈夫なんで」
鏡を見ていないから分からないが、顔に痛みはない、多分口元ぐらいだろう。
「そう」
何やら俺をジロジロ見てくる、外傷を探してるのだろうか。
「喧嘩・・・だよね？」
心配そうに聞いてくる。
「えっと、まぁ・・・」
やばい、やっぱり喧嘩したって分かるのか？なんて答えたらいいか分からず適当な返事しかできなかった。
「大藤君停学中でしょ？喧嘩なんてしちゃダメじゃん」
・・・・・・。
うん？状況が全く分からない、なんでこの人は俺の名前を知ってるんだ？しかも停学中ということまで・・・。
「えっと・・・誰？」
見覚えがない、学校の人だろうか？
「あはは、同じクラスだよ？まぁ大藤君二回しか学校来てないから分かんないか」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。
まーーーーじかーーーーー！！！！！！！おおお同じクラス！？
起きた時少し見とれてしまった事を思い出し、めちゃくちゃ恥ずか

しくなってきた。
「えっ？えっ？まじ！？」
俺は相当驚いていたのだろう、彼女は俺の顔を見て大笑いした。
「あはは、あーおかしい」
涙まで出して笑っている。相当おかしかったのか俺の顔は・・・。
「笑いすぎだろ」
俺はなんとか上半身を起こした。
「ごめんごめん、あはははは、あー久しぶりにこんなに笑ったよぉ」
あぁそうかい、そいつはよかったな～。
「えっと、同じクラスの小泉翼、よろしくね」
彼女は満面の笑顔を俺に見せてくれた。
「小泉さんね、覚えとく、この神社の人？」
彼女は薬箱を片付けながら向かいの椅子に座った。
「うんそう、うちの家が管理してるんだよ」
すごいな、見たところ小さい神社ではない、奥には門があり、まだ先がありそうだ。
「結構でかいな、って言うか管理してんのかすごいな」
「すごいでしょ？って言っても私は手伝ってるだけだから、ちょっとしたバイトみたいなもんかな」
金貰ってるのか身内のくせに・・・。
「バイトって・・・、金貰ってるのかお前は」
「まー小遣い兼でちょっと多めに貰ってるだけだから、あはははは」
手をひらひらさせて苦笑いする。
「まーいいや、小泉さ、俺が喧嘩したこと誰にも言わないでくれるかな？」
薬箱を膝に乗せうーんと考え込む、お願いだからそこは悩まないでくれ・・・。
「うーんいいけど、一個だけ約束しよう」
小泉はにっこり笑い人差し指を立てた。
「なんだ？」

「もう悪いことしないと約束したまえ」
何？なんだそりゃ？というか今回の件は不可抗力というかなんというか・・・。
まーいいか、そんなことでよきゃ。
「分かった約束する」
「本当？よかったよかった～♪副委員長が不良なんて皆に格好がつかないもんね♪」
ん？副委員長？誰が？
「えっと・・・、今何て？」
「だーかーらー副委員長が遅刻やら停学やらしてたら皆に示しが・・・、あっ」
えー、俺の解釈が間違ってなければ、俺は副委員長なのか？何だ副委員長って・・・おいしいのかそれは？
「えー、それはどういうことですかな？」
小泉は苦笑いして後ずさった。
「えーっと、今日クラス委員を決めたんだけど、副委員長が中々決まらなくて・・・それで片瀬先生が・・・大藤でいいだろうって・・・」
やっろぉーーーー！！何勝手に決めてんだぁぁ！！
俺はすっと立ち上がった。
「悪い小泉、片瀬だけ殴らせてくれ」
ちょっとちょっとと言い小泉は俺を座らせた。
「だめだよ！何言ってんのよ！！」
肩を掴まれ、激痛が走る。
「分かった、分かったから強く掴まないでくれぇ・・・」
冗談じゃなく俺はその場に横になった。
「えっと、ごめん、そんなに強く掴んだかな？」
いえ、多分普通に掴んだのでしょうが、今の俺にはとてつもなく辛いのです。
「いや、大丈夫、もうそっとしといてくれるかな・・・」

もう心も体もズタズタです。
「大丈夫？まぁ私が委員長だからあんまし悪い気はしないでしょ？」
ドンと胸を叩く、何言ってんだお前は、というかお前が委員長なのか。
「自分で言うな・・・」
「あははは、笑えなかったかな？」
俺の反応を見て苦笑いをする。
「笑えない、ドン引きです」
えーと言いながらしゅんとなってしまった。
「というかお前はこんなことしてていいのか？」
空を見るともう日が暮れかかっている。
「あーそろそろ家に戻らなきゃいけないなぁ～～、しんどそうだね、お父さんに言って送って行こうか？」
心配そうに俺の顔を覗き込む。
「いや、大丈夫、なんとか家には帰れるよ」
体はまだ痛むが、なんとか家には帰れそうだ。
「無理しなくていいよ？」
「いや、本当大丈夫だから」
俺は立ち上がりそのまま門へ向かった。
「手当してくれてありがとな、じゃ」
小泉はうんいいよ～と返事をし、そのまま俺を見送ってくれた。
この神社から家まで結構近い、5分もあれば着くだろう。
しかし世の中狭いもんだな、あんなところでクラスメイトに会うなんて、しかも衝撃の真実を打ち明けられた。
明日片瀬に抗議しに行ってやる。
あわよくば殴る。
家に着くころには大分体も楽になっていた。
家に入りソファーに座る。
あぁ、今日はいろんな事があったな。
あいつら約束守るかな？もし守らなかったらどうしよう。

あれこれ考えていたが、俺はそのまま魅惑のワンダーランドへ飛び立ってしまった。

第五話：新学期五日目

ふと目を覚ます。
時刻は６時０２分。
目覚ましより先に目を覚ましてしまった。
足が痛い、あぁ昨日は柄にもないことしたからな・・・。
目はすっきりしている。
二度寝は出来そうにはないな。
俺はそのまま朝の支度をするために起き上がった。
今日で朝の掃除も最後だ、今日が終われば楽しい二連休が待っている。
ウキウキワクワクなどと考えてはみたものの、やはり昨日の事が頭から離れない。
今更ながらあの方法で良かったのかと考え直してしまう。
だが、やってしまったからには後は様子を見るしかない。
あぁ・・・、なんて優柔不断なんだ俺は、まぁあれこれ考えてもしょうがない。
今日は７時にでも登校してみるか、と時計を見ると６時３４分。
意外と早く支度ができた。
俺は学校公認となった自転車にまたがり登校する。
結構登校してくる生徒がいる。
部活の朝練か、頑張るな。
ただお菓子を食べてるだけの奴らじゃないのか。
校門を通ると、今日は体育会系の教師が見回りをしていた。

　さて、今日は最後の戦いだ！！いざ戦地へ！！
どうせ部室が一番汚いだろうとふんで部室の周りから掃除を始める。
相も変わらずお菓子の袋が・・・袋がぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！
これは教師に言いつけてやるか。

などと考えていると、声をかけられた。
タカと薫だ。
「いよぅ、おはよ、朝から精が出ますなぁ」
「おはようコウ、頑張ってるね」
「おう、早いなお前ら」
見ると、タカはスポーツバックを持っている。
「おう、体が鈍るから朝練だけでも参加させてもらってんだ」
ん？部活か？確か来週のテスト明けから仮入部のはずだが、しかも正式の入部なんて来月からじゃないのか？
「あはは、難しい顔してる、タカちゃんと説明してあげなよ」
できればこの馬鹿に状況を説明してくれ。
「おぉそうか、俺スポ薦でこの学校に入ったんだよ、因みにサッカーな、んで推薦で入った奴は来週のテスト明けから部活に参加できるんだけど、特別に朝だけ自主練の許可もらったのよ」
なんとまー、頑張り屋さんだな～～。
「僕はやる事ないけどこの時間に一緒に登校してるだけ」
なんとまー、こいつのためにこの時間に登校なんて・・・馬鹿だな～～。
「あ、今お前馬鹿だろって顔したでしょ！！」
ぎくっ・・・。
「い、いやしてねーよ」
薫は本当か？と俺の顔を覗き込んできたがとっさに逸らしてしまった。
「あーっ！いま顔逸らしたーー！！」
とまーいつも通り他愛のない話に華を咲かせた。
ハッキリ言って、この間の事があるからしばらく話をするのは止めておこうと思っていたが、いらない心配だったようだ。
というより少し救われた。
あのまま距離が遠くなってしまわないかと内心不安だった。

二人と別れて他の場所を掃除していると、男子二人がやってきた。
「おい、お前が1年の大藤か？」
何ともまぁ唐突に、というかなんか切羽詰まった感じだ。
「そうだけど、あんたは？」
「昨日、俺の弟からカツアゲした金返してもらおうか！！」
見るともう一人の男が後ろに隠れて様子を窺っている。
というか何だそれは？身の覚えがない。
そして名を名乗れ。
「失礼ですが人違いじゃないですか？」
「さっき教師に確認してきたけど1年で大藤なんてお前しかいないそうだ！！」
大藤なんてとは何だ。
「今返したら教師には黙っておいてやる！お前今停学中らしいじゃねーか！」
「気を使ってくれて悪いが身に覚えがないんで」
胸倉を掴まれた。
「自分で名乗っておいて今さらシラを切るなよ！！」
なるほど俺は名乗ったのか。
「そっちにいるやつがあんたの弟？ちょっと話させてほしいんだけど」
「あ？何の話だよ」
「本当に俺だったか確かめたいんだよ」
そういうと怒れる男は手を離した。
「なー、よく見てみ、昨日あんたから金を取ったのはこの顔か？」
「ほら隆司、確認しろだとよ」
隆司はもじもじして一向に話そうとしない。
「もじもじしてないでハッキリしろこのボケェ！！」
ガッと両肩を掴むと、うわぁと両腕で顔を隠す。
こら！！と隆司兄に背中を掴まれ剥がされた。
「なに脅してんだこの野郎！！」

「い、いや、ハッキリしないからつい」
そうこうしていると、隆司がやっと口を開いた。
「あっ、えっと・・・、違う」
ほら見ろ人違いじゃねーか、と隆司兄を見る。
「で、でもそいつら、文句があるならこの1年の大藤が相手になってやるって・・・」
なんとまー、丁寧に自己紹介しやがって、バカ野郎が、普通に不自然だろ。
しかし、まさかあいつらじゃねーだろうな。
「そいつらまさか三人組じゃなかったか？」
その問いに隆司は頷いた。
「その中の一人は鼻を怪我してなかったか？」
その問いにも隆司は頷いた。
「やっろう・・・」
「なんだ、やっぱり人違いか？」
隆司兄が申し訳なさそうに聞いてきた。
「金を巻き上げたのは俺じゃないが、心当たりはある」
「なんだ知り合いかよ、誰だよ」
「2年の今停学中のやつら」
隆司兄は、あいつらかと顎に手を当て考え始めた。
「知ってるのか？」
「ん？まーな、同じクラスだし、たぶん高橋と池沼と板垣だろう」
同じクラスかよ、しかしあいつら約束した次の日からこの様か。
「で？いくら取られたんだ？」
隆司は相変わらずもじもじと・・・、腹立つな。
「に、二万」
おぉ出ました二万！高校生にしては大金だなおい。
「わかった、俺が取り返してやるから少し待っててくれないか？」
隆司は何も言わず頷いた。
「おい、取り返すってお前喧嘩すんじゃないだろうな？」

「時と場合と気分による」
「気分ってお前、いーよ俺が自分で行くから！」
と、隆司の手を取り去ろうとする。
「ダメだ！」
そのひと言で隆司兄は止まった。
「なんだよ、間違って疑ったのは悪かったと思ってる、が、犯人がお前じゃないなら関係ないからな」
関係ないわけあるか、勝手に人の名前を語ってんだぞ。
「たぶん俺のせいであの三人は調子乗ってるから、俺が責任持って片付けるよ」
俺はじっと二人を見つめた。
「だから心配せずに待っとけ、月曜日には渡せると思うから、何なら色付けるぞ」
「いやそこまでしなくても・・・、分かった取りあえずお前に任せるが、無茶はするなよな」
隆司兄はそれだけ言うと校舎に戻って行った。

また厄介なことになったな、めんどくせぇ。
しかしあいつらロクなことしないな、人との約束も守らねーし、まぁあんまし期待はしてなかったけど・・・、ここまで早く期待を裏切るなんて・・・。
しょうがない早く掃除を終わらせて探しに行くか。
そして俺は掃除を終わらせ職委員室まで足を運んだ。
さっき来る時に授業の終了のチャイムが鳴っていたから片瀬は居るはずだ。
失礼しますと中に入る。
片瀬は・・・、いない。
なぜだぁぁぁぁ！！
なぜ居ないんだお前はぁぁぁぁ！！
俺はそのまま保険室に行き報告を済ませた。

校門のところで会うかなと思ったが今日はいない。
まぁあいつに会いたいとも思わんが文句は山ほど言ってやりたい。
そんな事を考えながら俺は昨日のパチンコ屋に向かった。
流石に制服を着たまま中には入れない、居るとしたらあっちから出てくるのを待つしかない。
待つこと３０分、一向に出てこないな。
今日はいないのか？
一応昨日の公園も見ていくか。
うろ覚えだがなんとか昨日の公園までたどり着いた。
そこにあの三人ともう一人知らない男がいた。
楽しそうに話す四人、どうやら今日は違うパチンコ屋に行き、勝ったみたいだ。
俺が近付くと三人は俺に気がついた。
「おっ、大藤君じゃないかどうしたんだい？」
白々しい、どうしたんだい？じゃねーよ。
「昨日カツアゲしたやつの金返せよ」
三人は笑う。
「一日もしない内に約束破りやがって・・・」
「おぃおぃ何言っちゃってんの？俺ら手は出してないし」
他の二人が、なーと相槌を打つ、屁理屈こいてんじゃねーよ。
「終わってんなお前ら・・・」
俺が一歩前に出ると、もう一人の男が俺を阻む。
「おっと、何だお前、俺らとやる気か？」
「あんたには関係ないから邪魔すんな・・・」
「関係ない？なぁお前ら、俺がこいつをやったら飯おごれよ」
後ろの三人は、いいぜと言いベンチに座り始めた。
「俺は１年の頃は空手部でエースだっっ！！」
男は顔面に蹴りを喰らったが、一瞬の事で何が起きたか把握できなかった。
皇太は左足を振りぬく。

男は後ずさり、すぐさま敵を確認する。
が、目の前いっぱいに靴の裏が見え、男は意識を失った。
後ろで観戦していた三人がどよめく。
「今日は容赦しねーぞお前ら・・・」
皇太は少しずつ三人に近寄る。
「おぃ待てよ！かっ、金なら返す！！だからまっ！！」
皇太はそのまま三人を殴り倒した。

「よしよし二万はあるな、迷惑料でもう五千円貰っとくか」
カツアゲされた分と迷惑料を抜き取り財布を返す。
「カツアゲしたのはこれだけだろうな？」
一人だけ意識があり、何も言わず頷いた。
「今後、お前らが俺絡みで何かしでかすつもりなら、その度にこうして会いに来てやるから・・・覚えとけよ」
俺はそのまま公園を後にした。

最初からこうしとけばよかった。
この方が楽だ・・・。
あぁ小泉悪いな、俺もあいつらと同じで一日も約束守れなかったよ。
と気づくと神社の前だった。
少し寄ってくか。
自転車を止め、石段を上がると昨日と変わらない神社があった。
とりあえずベンチに寝そべってみる。
風が気持ち良いな・・・。

「おい、おい、にーちゃん風邪ひくぞ！」
俺は力強い声で目が覚めた。

「えっ、あっ、あー・・・」
どうやら寝てしまったようだ、辺りはすっかり暗くなっている。
「もう日が暮れちまうぞ」
「あー、んー・・・あぃ」
頭は起きているんだが体が動かない、一般的に言う低血圧なのだ。
「おい大丈夫か？」
俺はとりあえず頷いておいた。
「一人で帰れるか？」
とりあえず頷いておく。
「んー、まぁ大丈夫そうか、じゃー俺は行くからな、寝るなよ」
俺は頷きその男を見送った。
神主さんかね・・・。
まぁ、いいや。
いやしかし、まったく動く気がしない！！！
しばらくグダグダしていると日もすっかり落ちてしまった。
と、不意に後ろから押され、俺はベンチから落ちた。
「いってー」
「やっほー、何やってんの？」
小泉だ、そうかここは小泉の家が管理してるんだっけ。
「寝てた」
「風邪ひくよ？」
小泉は呆れたという顔をしている。
「しかも制服って、朝から寝てたんじゃないでしょうね？」
「昼から」
「あんま変わらないよ、風邪ひく前に家に帰りなね」
頷いておく。
「分かってんのかな？まぁいいや私行くからね」
俺は手をひらひらさせ小泉を見送った。
体に大分血が回り、動けるようになってきた。
と、奥にある門が目に入った。

あそこの先はどうなってるのかね？
見た限りでは外に繋がっているようだ。
門をくぐると生い茂る木々と、小さい池と大きな池が見えてきた。
小さい池からは湧水が出ており飲めるようだ。
大きな池には橋がかかっており向こうの道路に出れるようだ。
その橋で小泉が鯉に餌をあげていた。
「よぅ」
「やっほー、帰るん？」
「おぅ、神社の奥ってこんなんになってんのな」
俺も橋に寄りかかり池を見下ろした。
「水が綺麗でしょ？湧水なんだよ」
ちゃぽんと鯉が跳ねる。
「んー、そだな」
しばらくの沈黙、鯉が跳ねる音だけが響き渡る。
「なんだよ」
気がつくと小泉が俺の方を見て何か言いたげな顔をしていた。
「別にー」
小泉はそう言うと残りの餌をばら撒き袋を丸めた。
「そうかい、じゃーな」
俺は入ってきた門に向い歩き始めた。
「喧嘩・・・したでしょ」
一瞬大きい脈を打ち俺の鼓動は少し早くなった。
「ばっ馬鹿、してねーよ」
俺はそう言うとかまわずその場を後にした。
なんだあいつ、超能力者か？俺が何してたとか分かっちゃう人なのか！？
この物語は、そういう人が出てきちゃう物語なのか！？
水晶とかで俺の事を監視してたりしてるわけ！？水晶って何？おいしいの？
やばいかなり混乱している。

落ち着くんだ俺！！
家に着くまでには何とか落ち着いてはいたが、俺が喧嘩したことをズバリ言い当てられたのは驚いた。
今度聞いてみようかな・・・、いや、やめておこう、何か怖いし・・・。

第六話：その後

がやがや・・・。
この異様な人だまりは先週のテスト結果が張り出されたからだ。
「・・・・」
「どしたタカ？お前が順位見に行こうって言ったんだぜ？」
俺とタカと薫は掲示板の前で自分の順位を確認する
結果

近藤　薫　　４８９点　３位
大藤　皇太　４１２点　３２位
藤波　鷹尾　ランク外

「あー・・・お前らすげーなー」
俺はタカの肩に手を置き、そっと食堂へ連れて行く。
「俺イチゴオレ」
はいはいと自販機からジュースを取り出す。
「しかし意外だなぁ、コウって結構頭良いんだ」
「はいそこ、ジュース返せ」
ジュースに手を伸ばすがヒラッとかわされる。
と、入口のところで隆司と目が合い軽く挨拶した。
「４組の隆司君だね、コウ知り合いなの？」
「まぁーねぇー」
隆司には取り返したお金にちゃんと色を付けて返した。
それからたまに話すようになった。
変な出会いだが俺にも友達と呼べる奴らができた。
中学時代を思い返すとなんだか信じられない。

そうそう、俺の副委員長の件だが、片瀬に抗議したがあえなく却

下を喰らった。
といか片瀬の一言で俺の心は折れました。
「といか今から変えるのめんどくさいし・・・」
あいつは本当に教師なのだろうか？
あんな男が教師なんて世も末だ。

食堂をでて教室に向かう。
「歩きながら飲むなよ」
「いーじゃんかぁ」
紙パックにストローを刺す。
「ていうかまだ飲むんだ」
薫があははと苦笑いでタカを見る。
「おっ、学年５位の女だ」
見ると小泉が数人の女子と話をしている。
「小泉さんだね」
「男子の間で結構な人気らしいぜぇ」
タカは俺の肩を組み顔を近づけてくる。
「あっ、そう」
俺はタカの顔を遠ざけた。
「話によると巫女さんらしいぜ」
またも顔を近づけてくる。
「あーそーぉ」
俺はタカを遠ざけた。
と、小泉と目が合い手を振ってきた。
「おっ、手振ってきたぜ」
タカと薫はにこりと笑い手を振り返した。
「いよ、学年５位」
タカは小泉達の所に足を運ぶ。
「あはは、その呼び方はいただけないなぁ鷹尾君」
「そうだよタカ、ちょっと失礼だよ」

「ちょっとぉ？」
周りにいた女子達はそのやり取りを見て笑っている。
「あれ？コウは？」
俺がいないことに気が付く、が、誰もその詳細を知る者はいない。

中庭に大きな桜の木がある。
木の下ってのはなんでこんなに落ち着くんだろうか？
俺は予鈴が鳴るまで、桜の木の下で過ごした。
葉がざわめく音が心地よい・・・。

放課後を告げるチャイム程、心待ちにするチャイムはないだろう。
俺が帰り仕度をしているとタカがウキウキワクワクしながら俺のところへきた。
「コーウ君」
がばっと俺の肩を組む。
「あんだよ、離れろ気色悪い」
体ごと突き飛ばすとタカは大げさに倒れた。
「あんだよー、いい話持ってきてやったのにぃ～～」
「いい話？」
俺が興味を示すとタカは目を輝かせ始めた。
「そうだよ～ん、実はな今週の日曜日に小泉達と遊びに行く約束を取り付けたのだよ！どうだ！！」
いや、どうだと言われてもどう返していいのかわからん。
「そうか、よかったな」
俺の興味は一瞬にして無くなった。
「あんだよ、コウも一緒に行こうぜ、あっち3人なんだよ、今んとこ俺と薫の二人だからさ、お前が来てくれたら3対3のデートだぜ？なっ？」
再び帰り支度をする俺を邪魔し始めるタカ。
「何だよデートって、おいしいのかそれは？つーかお前部活は？」

バンっと鞄を閉める。
「来月までは土日は休みだよん」
「なんと待遇が良いことかなスポーツ推薦」
鞄を掴んで離さないタカを押しのけ俺は教室を出た。
「おぃおぃ、行くのか行かないのか？」
「興味なし」
「まじかよ～、デートだぜ？しかもあの小泉達と～」
この浮かれ具合がなんとも腹がたつ。
その小泉がどれほどの者かすら俺には分からん。
「日曜は用事があるんだよ、また今度な」
俺はそう言い帰路に着いた。
しかし小泉は結構な人気があるんだな、入学してわずか二週間足らずでこの人気とはすごいな。
まぁ確かに美人だが・・・。

そうだ、あの三人の事だが、あれから廊下で何回かすれ違ったが無理やり俺の方を見ない様にしているというところを除けば特に変わった様子もない。
後は2年間大人しくしていてくれる事を願うばかりだ。

日曜日
俺の家に二人の訪問者が来た。
おじさんとおばさんだ。
「意外と綺麗にしてるんだね皇太君」
「意外とって何ですか意外とって・・・」
俺はお茶を酌みながらおじさんの冗談に付き合った。
「でも安心したわ、ちゃんと一人暮らしができてるか不安だったけど・・・、ちゃんと炊事もしてるみたいだし、おばさん見直しちゃった」

おばさんは俺の部屋を見ながら俺の生活を想像している素振りを見せる。
「まー、やってやれないことはないです」
あらあらとおばさんはほほ笑んだ。
「じゃー取りあえず、来週には仏壇を持ってくるよ」
出したお茶をすすりながらおじさんはほほ笑む。
「すみません、お手数掛けます」
「いやいや、死んだ光喜達も息子の傍に居たいだろうし、僕等に出来ることならどんどん言ってくれて構わないよ」
「いえ、おじさん達には十分良くしてもらったので」
俺も椅子に座りお茶をすする。
「しかし君は強いな、君の両親と妹さんが交通事故で亡くなった時は・・・、正直見ていられなかったけど・・・」
「そうね、今はちゃんと自分で道を決めて歩んでいるものね」
俺は俯いて何も言えなかった。

俺の両親と妹は俺が中学3年に上がった頃に交通事故で他界してしまった。
残された俺を養ってくれたのが、親父の兄である幸俊(ゆきとし)おじさんだ。
当時の俺は酷く落ち込み、荒んだ1年を過ごしていた。
おじさんとおばさんは、俺がする事をただ見守っていてくれた。
喧嘩にしろ何にしろ一度も怒ってくれたことはなかった。
当時は、どうせ他人だからどうでもいいんだと自虐的な考えをしていたが、俺が一人暮らしをしながら高校に通うと話した時、よく立ち直ってくれたと泣いて喜んでくれた。
何もしてやれなくてごめんとまで言われたが、それは俺の台詞だ。
俺が過ごしてきた1年間を何も言わず見守っていてくれてありがとうと言いたい。

おじさんは、親父の遺産を何も手をつけず残して置いてくれた。
通帳を見たが相当の額が入っており、高校へ行かずこのまま遊んで暮らせるのではないかと思ったぐらいだ。
悪いからと、養ってくれた1年間分の費用は置いてきたが正直使ってくれてるかは分からない。
そんな事があり、おじさんとおばさんが月に一度様子を見に来るということで俺は一人暮らしの高校生活を始めることができた。
おじさん達は立ち直ったと言ってくれたが、正直俺は立ち直ってはいない、ただ一人になりたかっただけなんだと思う。
家族を亡くした町にいるのが嫌で、この街に越してきた様なものだし。

家族を失ってから、何をしても心から楽しめない自分がいること、もう誰かを失うのは嫌だという思い。
トラウマと言えばいいのだろうか？俺は嫌なことから逃げだすためにココにいる。
そんな思いを持ったまま、おじさんとおばさんに心からお礼は言えない。
できれば高校でそんな自分を変えたいと思ってはいるが・・・、どうなる事やら。

日も落ち始め、俺はおじさんとおばさんを見送り、ぶらり散歩に出かけていた。
双葉神社、俺がこの池に来るのは二度目か・・・。
橋の上から池を見下ろす。
暮れかかる夕日に照らされた雲が綺麗だ。
俺の頭上から向こうにかけ彩る光のグラデーションが何とも神秘的だ。
このまま吸い込まれてしまいそうだ・・・。
不意に背中を押され俺は池の中に落ちそうになった。

「うぉっと！！あっぶねぇ！！」
「あははは、ごめん・・・びっくりしすぎぃ・・・ぷぷっ」
小泉か・・・、笑いすぎだ。
「なにやってんだよ・・・ったく」
俺は反対側の手すりに寄りかかる。
「それはこっちの台詞だよー、何で今日来なかったのよ？」
「今日は用事があったんだよ」
「ふぅーん・・・」
小泉も手すりに寄りかかる。
「デート？」
すっと顔を覗かれる。
「どうだろうね」
「ふぅーん・・・」
しばらくの沈黙。
「なー、一つ聞きたいんだけど」
「なーに？」
風に靡く髪が綺麗だった。
「女の感ってのは・・・よく働くのかね？」
ちゃぽんと鯉が跳ねる。
「どうだろうね」
彼女のほほ笑みを月が優しく照らし始めた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3051f/

Rainy Day Blue

2010年10月11日04時37分発行